

# カイコからカイゴへ

## 繭の家から紡ぎだす村の福祉

### 〈縁家プロジェクト〉

養蚕住宅が持続可能なコミュニティ再生への拠点となる

消滅した養蚕業の遺産となる築117年の養蚕住宅を地域コミュニティづくりの拠点として再生する。3年前に開設した地域密着型通所介護そらいろデイはその第一歩。介護は特別な場所で特別な事をするのではない。当たり前暮らしを当たり前前に送ることを支援するケアである。当たり前暮らしとは、口からおいしく食べ、ぐっすり眠り、たっぷり飲み、トイレにすわってすっきり排泄し、お風呂にゆっくりつかり、多様な人と豊かな関係をつくり、遊びを夢中で楽しむことこそ、高齢者を元気づける元である。こうしたケアの場を要介護老人だけでなく、不登校や引きこもりといったケアの狭間にいる人たちも含めたイデコロとなり、ナリワイづくりにつながる地域に開かれた拠点となる。

事業の背景 この地域の抱える課題

福島県伊達郡桑折町伊達崎是全国有数の桃の産地で果樹園が広がる地域である。また、古くから養蚕業で栄えた村でかつては多くの家で繭が作られていたが現在は養蚕業は消滅。近年は人口減、少子高齢化により離農、耕作放棄地、空き家が増加。地元小学校も児童数は70人と最盛期の6分の1に。市街化調整区域という縛りの中、空洞化が進行。将来コミュニティは存続していけるのか。やがて無住の地になるのではないのか。そんな地域に向き合い、かつての地域産業であった「カイコ」の養蚕住宅を地域で直近の問題である「カイゴ」へ転用し介護をベースとした新しい縁を紡ぎだす地域福祉づくりへの取り組み「縁家プロジェクト」を提案する。

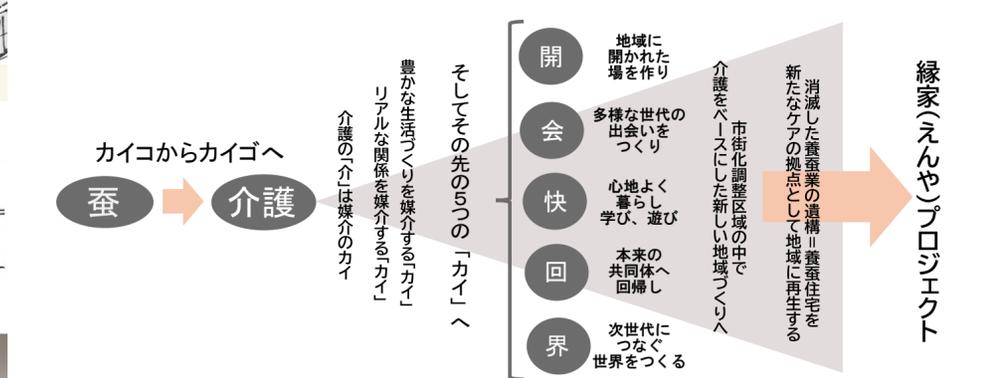


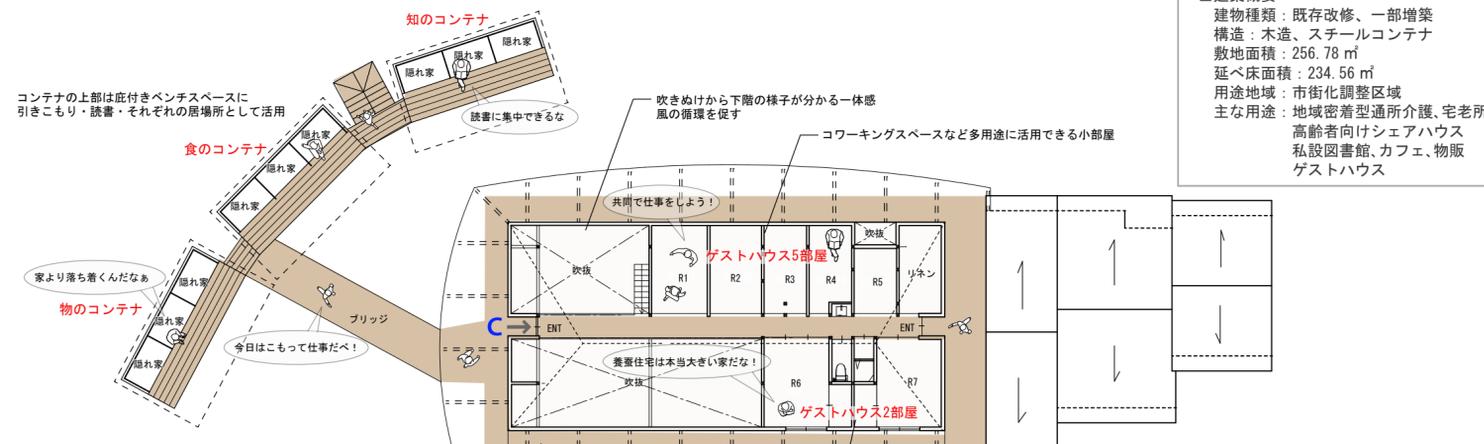
### 「そらいろデイ」 これまでの歩みと地域との歩み

「村の中で介護の場をつくり、生活の場が介護の場となり、終の棲家をつくる」そんな思いで2019年からそらいろデイの開設に向けて動き出す。近隣住民のサポート、県との協議を重ね1年を経て「地域密着型通所介護そらいろデイ」の開設にこぎつける。当初は認知度も低く問い合わせも少なかったが、次第に利用者も増えて地域にそらいろの存在が広がっていく。2022年、地域のみならず介護を考える運営推進会議を立ち上げる。村の関係者達が集まり地域の介護について話し合いを持つ。2023年、認知症ケアセミナーを町の社協との共催で開催。そらいろデイでも定期的に講師を招いて介護技術講習会を町のバックアップのもと開催。多くの地域住民が参加し改めて地域における介護の重要性を認識。2024年11月、町主催の介助技術講習会をそらいろがコーディネーターとして協力、準備中。町との相互協力関係が地域における活動の広がりを後押しする。また、高齢者だけではなく多様な世代の受け皿となるべく新事業を展開していくことに。町と県もそらいろの活動に理解を示し、今後は行政と共に活動を展開していきたい。



### カイコからカイゴへ そしてその先の「5つのカイ」へ





2階平面図 1:200

■建築概要  
 建物種類：既存改修、一部増築  
 構造：木造、スチールコンテナ  
 敷地面積：256.78㎡  
 延べ床面積：234.56㎡  
 用途地域：市街化調整区域  
 地域密着型通所介護、宅老所  
 高齢者向けシェアハウス  
 私設図書館、カフェ、物販  
 ゲストハウス

設計コンセプト

この地域には養蚕業の遺産ともいえる養蚕住宅が今も数多く残っている。そして市街化調整区域という制度に縛られ「養蚕住宅」という用途のまま放置されてきた。しかし、福島県は衰退する地域の維持や再生につなげるため、同区域内でも事業用建築物に用途変更ができるように基準改正に舵を切った。築117年のこの養蚕住宅も地域のニーズに合わせて、既存の建物を生かしつつ多様な場を付加することで新たな価値を吹き込む。母屋をめぐる半屋外デッキ=まゆ縁側もその一つであり開放的な中間領域は多様な人が出会い、つながりを紡ぐ場になる。また母屋2階部分の蚕棚があった空間の活用をはじめ、敷地余剰地のコンテナ設置によるマルシェカフェ等の創出はこの地域に残る他の養蚕住宅にも汎用できる内容・工法となっている。そして、災害時への対策として太陽光パネルの設置、既存井戸を活用して備えていく。このような拠点整備がかつての産業遺構をベースにした地域独自の地域福祉ネットワークの基礎となることを期待する。

場と暮らしを紡ぐ空間づくり

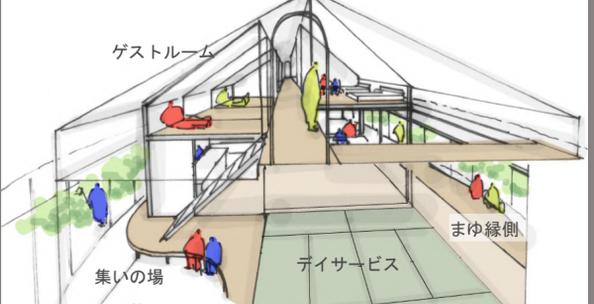
暮らしの場そのものが介護の場。太い柱、漆喰の壁、畳、光あふれる縁側、床の間、土間、座敷。この地域の養蚕住宅には必ずあった風景。こうした昔ながらの空間と機能をケアの現場に取り込みながら懐かしさと心地よさを創出する。母屋周囲をめぐるまゆ縁側は土間空間を通して隣接するマルシェカフェや私設図書館、納屋工房とつながり周辺敷地や農地ともどこからでもフラットにアクセス可能とすることで、閉じがちな介護現場を空間的にも心理的にも開放し多様な世代との交流の機会を創出する。さらに、そらいろ内外の各セクションの繋ぎやフィルターともなり、スタッフや利用者同士よく見えあう関係を作り出す。このように、かつての縁側の機能をさらに拡張させ、地域との空間的、精神的な親和性、開放性を形にした。また、母屋上部とも繋がるコンテナ上部空間にも落ち着いて過ごせるイドコロを兼ね備えることで、利用者やスタッフはもちろん、この場を利用する方々の垣根を超えた同じ目線でつながることができる空間を整える。



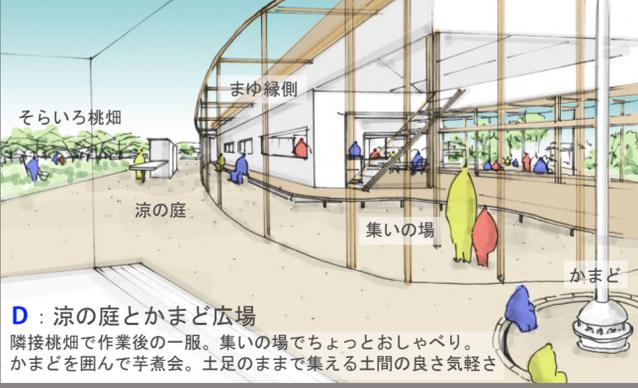
A: 地域に開く 周囲に開かれた場となるよう、道路から敷地全体が見渡せる。木々に囲まれた心地よい空間の各所での活動が、見渡せ見守られる



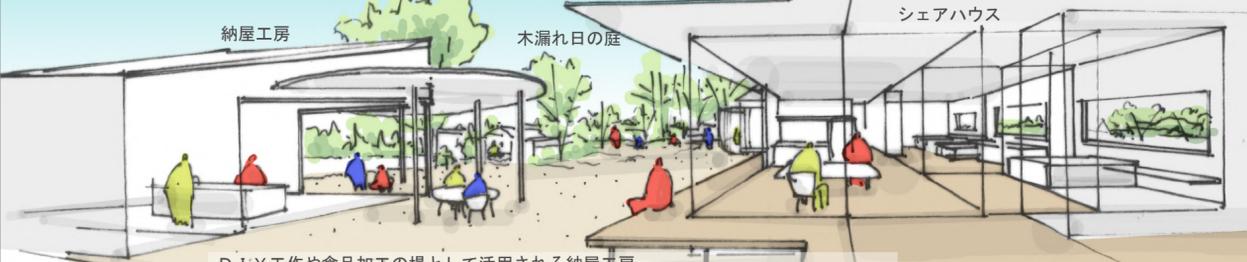
B: 内部各所ともつながる 建物の内外・上階とも視線がつながり、利用者・スタッフの動きはもろろん、地域の方々とも見えあう関係。視線だけでなく光と風がかけめぐる



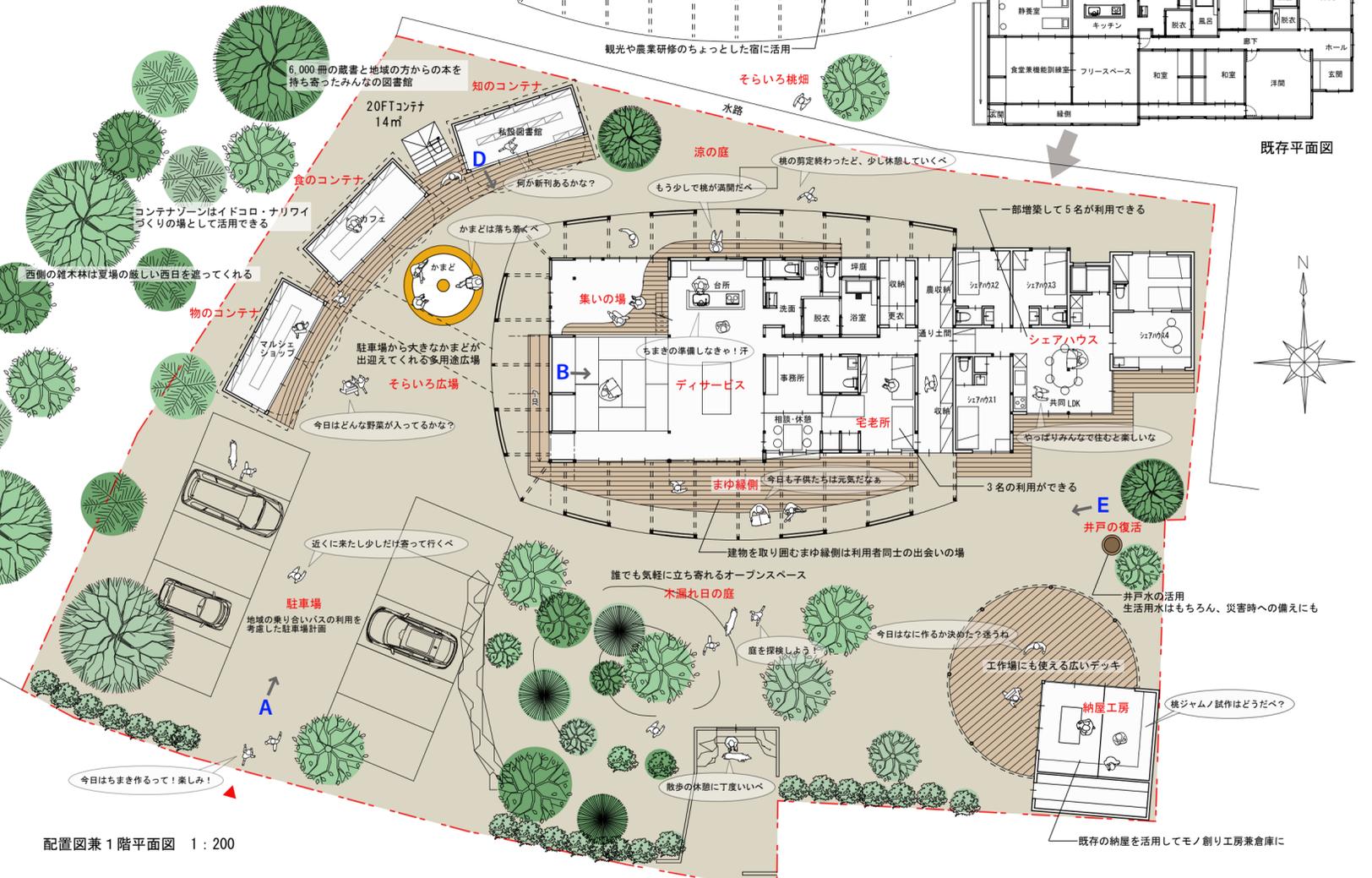
C: 母屋2階 これまで使われていなかった蚕棚空間は、ワークスペースにもなるゲストルームとして活用。落ち着いた居場所づくりに貢献する



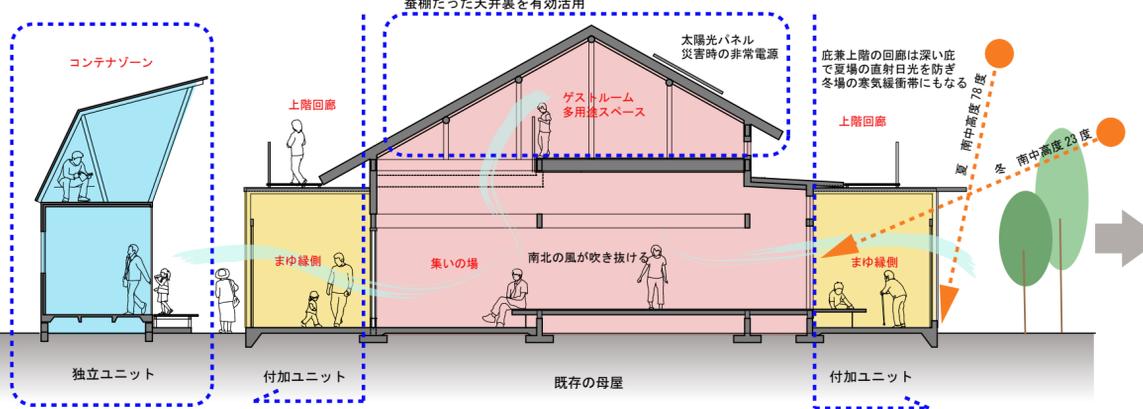
D: 涼の庭とかまど広場 隣接桃畑で作業後の一服。集いの場でちょっとおしゃべり。かまどを囲んで芋煮会。土足のままでも集える土間の良さ気軽さ



E: 創るを楽しむ D I Y工作や食品加工の場として活用される納屋工房。創作活動を介してシェアハウス住人や地域の方々との交流も促す半屋外空間が大活躍!



配置図兼1階平面図 1:200



南北断面図 既存の母屋にまゆ縁側を付加し、空いた敷地スペースには独立ユニットとしてコンテナを置く。他の養蚕住宅にも汎用できる形態。養蚕住宅の特徴を生かし、かつての蚕棚空間を小部屋として有効活用。周辺環境を生かした新たな付加で夏場空調に頼らないパッシブな建物を目指す。

